

展景

No.61



2011年3月1日 通巻第61号
オンライン版 第1号

無二の会
muninokai.com

目次

レモングラスの香〈短歌〉	……………	結城 文	3
何かがおかしい〈短歌〉	……………	池田桂一	4
琥珀のネックレス〈俳句〉	……………	岩田都女	5
チエの輪〈短歌〉	……………	小野澤繁雄	6
履物〈短歌〉	……………	河村郁子	7
水墨画展〈短歌〉	……………	布宮慈子	8
ことしの柿〈短歌〉	……………	丸山弘子	9
近江気まぐれ文学抄 (30) 井ノ部康之『琵琶湖炎上』	……………	新関伸也	10
茄子の話	……………	松井淑子	11
〈那須通信6〉回帰	……………	加藤文子	12
60号作品短評	……………		14
東京歌会 (第十八回)	……………		17
〈特別企画〉布宮みつこ	……………		18
対詠「ごきげんいかが?」PART 37	……………	小野澤繁雄／布宮慈子	21
「清紫会」だより	……………		22
外山滋比古先生を囲むエッセイ教室「清紫会」の作品より			
グラントゼロの鉄骨	……………	結城 文	23
うまそうな雪	……………	池田桂一	25
戻ってきたパスモ	……………	岩田トメ	26
板橋宿の小鳥屋	……………	松井淑子	27
無二の会短信	……………		29
編集後記	……………		31

レモングラスの香

結城 文

家の灯のともりそめたる冬の街人にやさしきわれでありたし

犬つれし女夕闇より出でつチエホフともに読みしよ昔

コンクリートにおほはるる地より救ひたる赤まんじゅしゃげ白き茶の花

誰かいま境越えしか目を洗ふときむらさきの光走りつ

一人にて我^あは住みをれどさびしとは思はず秋の雲のしろがね

わが視力越ゆる彼方へゆきしものら雨になり光となりて降りくる

この星にかたみに親と子と呼びて生きし偶然のおろそかならず

いつぱいに伸ばしたる手の指先に小さき電球のともれるごとし

夜の明けのもつとも暗き冬空をわたる雷神に目覚めたりしか

夢のなかで馴れしたしみし道なりきさやさやレモングラスの匂ふ

何かがおかしい

池田桂一

列を組み小旗を持てる学童こどもらの登校見送る交通安全

挨拶を交わして通る学童らにほほ笑みかえし交差点に立つ

登校の学童らを見送り十字路に立てる時間の年毎に減る

少子化のすすみて登校の列は減りわが集落に子供の声なし

校庭に子供らの声ひとつ無く連休の午後も風のみ遊ぶ

沼辺りに柵をめぐらせ子供らの安全策とのたもう親は

静かなる学校が良しといいすてる人のことばに反感持ちぬ

ふるさとの河川は汚染のすすみきて人影も鳥影も映さぬ水面

わが家の前通る子に声掛けをすれば不審者のごとく避けゆく

個人情報を勘ちがいして名前まで隠す子供らを哀しみ見つむ

琥珀のネックレス

岩田都女

眉を書き大和三山眠りをり

春幾たび唐高僧の供養塔

天地指す釈迦牟尼世尊囀れり

春の夜の白湯に甘みのありにけり

八重桜むらさき含みゆく夕べ

炎天や行き交ふ人の誰も黙

指先の知る塩加減茄子漬かる

掌を委ね爪の手入れや小鳥来る

十月の肌に琥珀のネックレス

ミサ曲のバリトンテノール冬銀河

チエの輪

小野澤繁雄

三人に二人が犬連れはこの沼辺秋のさきぶれ一部が枯れて

暑がりとしたがう犬を云う女は犬が死ぬるは夏が多いとも云う

辻という辻より中坊ら現れてわれの歩みに交差する通学路

「涼しくなっても疲れるね」冒頭に置くその日さいしょのメールの

コーナーに一つ残れる掻揚げの前を占めつつ袋手にする

くちなわはチエの輪のよう道上に解かれることのないになきまま

黒蝶はわれの歩みをさえぎってわれの及ばぬ黒土の上に

気づかずに前を歩いて黒犬の身を起こさしむ二度謝りぬ

いろいろあるよ新美さんが云う「男前猫」第一にしもぶくれ度という

臨港地区にくらす猫たちを「工場猫」と呼ぶ写真家低き位置どり

履物

河村郁子

雪駄履き桐生お召しの着流しに浅田次郎は蒔蓄しきり

履き倒れはお江戸の粹よとご隠居さん大見得切って桐下駄買った

枳目立つ与板屋の下駄は形見なり母の好みし鼻緒を擦る

わが立てる駒下駄の音なつかしみ夏の夜道を輪踊りに行く

レセプションに履き替えてきた若き日のパンプスとんと馴染んでくれぬ

「ベッドから下はなんにも見えないの」 白いスリッパ揃えてありぬ

砂浜に打ち上げられているスニーカー片方だけの アディダス キッズ adidas kids

八月の死者に手向ける白き足袋 足袋など履かぬ女おみなでありしが

急死せる教え子に手向ける蘭の花ゴルフシューズの上に載せたり

さまざまの履物選びて来たれどもこれより先はウオーキングシューズ

水墨画展

布宮慈子^{やすこ}

小さきもの小さき声に癒されてをりぬこのごろ秋風吹きて

言ひたきこと言ふべきことのあるなしを思ふべランダに虫は語らず

日本橋室町に出で日本橋本町へ参る江戸歩くごと

水墨画とふを見むとてギャラリーを探せば着きぬ小津和紙本店

何年ぶりだらう墨絵の勢ひの増しつつ岡田さんの笑顔よ

主人公のおっちょこチョイ姫まんまるの顔をしてゐる著者と違はず

あぢさゐやすいれんひまはりあさがほがみんな笑ひて動きさうなり

君が筆、墨とかすれも柔らかに平成の江戸の物語せよ

半ばなる塔あらはれぬ日本橋堀留町ゆけば〈空〉を冠して

見も知らぬ街にポストと郵便局いち早く見つけ秋の日暮るる

ことしの柿

丸山弘子

菊脍つくらん今宵たぎる湯に両手にあまる花びら放つ

好まねどなければさびし酉の市の桃色提灯中止となりて

吾に倣ひ幼が落葉を踏みあゆむ両手にすくひて高きゆ放つ

ひよどりの取り分は残し柿の実を収穫したり十に満たねど

いつも来る目白の番ひよどりの残しおきたる柿啄めり

かたはらに一羽が見守るひよどりも目白も庭に木の実食むとき

鴉メが隠しおきしやプランターのベゴニアの間に食パン一切れ

後脚の筋肉の衰えいちじるし柴犬は尻をおとしてあるくクーチャン

ひねもすを襤褸に過ごすとふ犬ながら時刻ときくれば外出を促すといふ

大小の水槽おかれ一間の床の間は亀らの場所になりはつ

井ノ部康之『琵琶湖炎上』

にいぜき
新関伸也

北近江の小谷城主浅井長政は、南近江を支配する観音寺城主六角義賢と鏝迫り合いをしながらも、自領の繁栄と平和を願った戦国武将である。湖上を行き来する帆船に目を細め、たわなに実る稲穂を心から民と喜ぶ領主の姿が目につかぶ。むしろ静かな男と言つてよい。信長の妹お市を娶ったことも領内の安定平和のためであった。同盟関係は他国への侵略の策ではなかったと言える。

対して信長は天下布武を掲げた武将である。戦に勝ち、背く抵抗勢力を武力と知略をもつて殲滅し、乱立する戦国大名を配下に置くことを最大の目的とした、スケールの違う動的な男である。天下統一のため天衣無縫に生きた信長と忠義に生きる長政は対照的である。生き方が違えば、当然関係も変化する。浅井と織田の同盟関係は、反故となり、事態は暗転していく。ついに信長が浅井との盟約を破り、越前朝倉義景を討つために支城天筒山城、金ヶ崎城を攻め滅ぼす策略にでる。一方、長政は初代亮政以来朝倉家とは同盟を結んでおり、信長との姻戚関係があるとはいえ朝倉を見捨てる訳にはいかない。長政は躊躇するが、忠義を重んじ信長を討つ援軍を出さず決断をする。信長は長政の寝返りを信じようとしなかったが、お市の送った小豆袋によって自らの危機を知る。それは、小豆を筒状の布に入れ、片方を麻糸（浅井）で結び、もう一方を和紙（越前和紙＝朝倉）のコヨリで結んだものである。もはや信長は浅井と朝倉に挟まれて逃げ道のないことを暗示したものであった。信長は地団駄を踏むが万事休す、織田軍は勝つ見込みはない。一転わずかな側近だけを引き連れて、馬に跨がり琵琶湖の西の朽木道を命からがら逃げ延びる。妹お市の機転を利かした小豆袋の寓意で信長の命は救われたのである。

これを裏切り者のお市と断罪してはならない。戦国時代の政略結婚は夫婦の情に勝る義務があった。浅井を謀報する役目がお市に課せられていたのである。

この浅井の寝返りに信長は刃を向けるのは当然であった。天正元（一五七三）年、小谷城は信長の総攻撃により落城。久光・長政は城中で自刃するが、お市は三人の娘茶々、お初、小督（お江）と共に生き延びる。自らの意志だけで女が嫁ぐことなどあり得ない時代、子孫繁栄こそ女の仕事であり、役目であった。

今、NHK大河ドラマ「江」は、長政の三姉妹を中心に据え、戦国時代の女たちを象徴的に描いている。

茄子の話

松井淑子

ピリ辛の味が好きである。

うる覚えだが、しばらく前に読んだ池波正太郎の『仕掛人・藤枝梅安』という時代小説のどこかで、たしか登場人物の一人が、

「茄子^{なす}とからしはよく合うなあ」

といった意味の科白^{せりふ}を言っているのを見て、なるほど、と思ったことがある。

ピリ辛味とは関係ないが、やはり同じ作品に、お盆に山盛りにした千六本に切った大根を湯豆腐鍋にパツと放りこむ、という場面があり、早速まねをしてみたところ、これがなかなか気に入って、ひと冬じゅう食べていたことがある。

茄子も私の好物である。茄子の季節になったら、からしとの料理を考えてみようと思っていた。

料理はきれいなほうではないが、母親の手伝いをしていううちに見よう見まねで覚えただ、という程度で、正式に教わったことはない。それでも以前は、料理本を片手に大掛かりな一品に挑戦してみたこともあったが、近ごろは、簡単に手早くできる、というものがかり作っている。

それも料理の専門書ではなく、小説、エッセイ、新聞・雑誌記事などにチラツと出てきて、こちらが「おいしそう」と思ったものを、作り方は想像で補って自己流に作る。幸い独り暮らしのため、失敗しても誰からも文句を言われる心配がない。まずければ、自分だけ我慢すればいいことである。

秋口になり、出盛りの茄子を前にして、これをからしとどういうふう料理してみようかと考えた。

焼き茄子とからし醤油の組み合わせは好きだが、いま食べたい味とは違う。いま食べたいのはもう少しコクのある複雑な味だ。そう思ったら、茄子のからし漬けの味が浮かんできた。そうだ、あの味にしよう、と思った。

まず茄子を、からし漬けに使う小茄子ぐらいの大きさに乱切りにする。塩を振ってしばらくおいてから、水洗いしてよく絞る。練りがらしを小鉢にあげ、からし漬けの味を念頭におきながら砂糖を加える。味に奥行きを出すためにお醤油とお酒を少々入れる。これで茄子をあえる。

食べてみると辛みがツンと鼻に抜け、涙がポロポロと出た。うん、この味、この味、と満足し、これを私の料理のレパートリーに加えようと考えた。ただ惜しむらくは、私の料理はつねに同じ味が二度と出せないことである。

回帰

加藤文子

展覧会が終わり、搬出の片づけもひと通り済んだ。盆栽の仕事を再開したいのだが、庭に出て植物と対しても、うまく焦点が合わない。いつもなら水やりなどしていると、当たり前気づけるはずの種々の事柄が、目に入っただけで来ない。何をしたら良いのだろう。仕事が見つかからないのだ。

無理に仕事に向かわせようとする自分がいて、庭をウロウロするものの、心がついて来ない。どうも感覚が違う。

普段めったに人と会うことのない生活から、展覧会を迎えて、短い時間の中で大勢の方とお話したことが、原因と考えられる。特別むずかしい会話をしたわけでもないのに、波立つ心が収まらない。



こんなもどかしいような調子が、三日ほど続いた。四日目のこと、朝から久々雨が降っていた。水やりは休み、ゆっくり過ごそうと心を緩めたとたん、来週に控えた「植物のお話し会」のことを思い出した。幾鉢か盆栽を持参して、ご覧いただくことになっている。解説など当日の内容を組み立てるには、まず盆栽を選ばなければならない。

こんな雨模様では突然の来客もなさそうだし、落ち着いて作業をすすめることができそ

うだ。今日の雨は、仕事をさせてくれるために舞い降りたサポーターのように感じる。雨に包まれ、守られているような安心した気持ちになる。

どんな盆栽を持っていったら良いのかしら、小さな鉢、中くらいの鉢、実の成る木等、選び出しながら庭をめぐる。めぐるうちに、まるでベールが取り除かれるように、仕事が見えてくるのだった。

棚上に細かな虫の糞を発見、隣接する盆栽が虫にやられている証拠である。季節の変化に合わせて、置き場を変える必要のあるもの、カイガラ虫が付着した幹や枝、次々にするべきことが現れる。

鉢を使う、ピンセットを使う、ブラシで幹を洗う。棚も洗う。手足が自然に動く。しかも、ちっとも疲れない。心と体が、ようやく繋がったようだ。

夕方には、「お話し会」の準備も整っていた。

60号作品短評〈小野澤〉

●黒揚羽の女男なりながく睦み合ふ五がつ紫蘭の咲けるわが庭

丸山弘子

雌雄でなく、番いでもなく「女男」。それが「ながく睦み合ふ」という。それは、みている時間の長さでもある。場所がどこであれ、ある種奥行きのある思いが伝わる。次の歌「切らんとする葉にゐる揚羽蝶の幼虫の食欲旺盛のさまを見飽かず」、ここでも見飽かず、なのだ。

●わが裡の麦秋の野に風わたり伝はりゆく黄金のうねり

結城 文

どの歌も全体に油絵のようにもして、内部の厚みのある感情を、具体にのせて詠う。合評会席上で、「伝はり(て) ゆく」と「て」が補われた。今正に収穫の野に、風が吹いて、そこを黄金色のうねりが伝わってゆく。それは、「わが裡の」イメージだが、詩歌の風土でもある。「湿原の浮島ずるりと動きたり」には、ドキリとした。

●山形よ(詩)

安達裕之

ダス、スイガがさいしよ判らなかつた。三連、全体で八行の詩。最初の連は、山形の食文化、名産とのかかわり。二連目は、もっと卑近、私的な範囲での食いものを列挙。三連目は、まとめとして月山を出す(雲の峰いくつ崩れて月の山)。懐かしい、だが私的でもある山形。

●カロリーの制限食に飼われおり 血糖値コントロールに四苦八苦して

池田桂一

タイトルは「今年の検査入院」。小文は、「一日を短く過ごしている」という作者の抱えた二つの病のことだが、子猫の話でもある。乳腺炎で死んだ親猫のことから猫用トイレまで、首尾のしっかりした切実なところのある小文になった。歌では三句の「飼われおり」の表現に、合評会では賛意が集まった。

●新聞に入院の友の歌載りてそれより二ヶ月訃報が届く

市川茂子

新聞に歌が載って、そのことで作者との間でやりとりがあったか。あったらどう思う。そのことの後日談としては、重い事実、こともあろうに本人の死がしらされた。作者は、そのことを何も足さずに読み手に渡す。

●二戦目は「オレンヂ軍団」のスナイデルを二瞬自由にさせてしまつて

布宮慈子

結句「自由にさせてしまつて」は、解説者(観客)の口吻をそのままとったものだが、新鮮。ワールドカップ(タイトル)も何もかもすぐすぎてしまう。「殿ヶ谷戸庭園」の歌で、ここ(固有名詞)が歌にしていると、思った。

60号作品短評〈慈子〉

●庭に咲きし最後の黄バラ一本が机の上でふつと笑えり

大石久美

なんとも不思議な一瞬をとらえた歌だ。最後に咲いた黄色いバラをたいせつに思う作者の気持ちとバラの思いが重なりあう。バラが笑うわけではないのだが、いや笑ったのかもしれないと思わせる表現の妙。最後に置かれた歌「忘れきし黄色の上着かの家の夕闇のなか灯りておらむ」と呼応して、黄色がさらに印象づけられる。

●公園の周回路をひたすらに走る人かれ歩く人われ

小野澤繁雄

ここで注目するのは作者の位置。「かれ」と「われ」の対比とわかってしまえば、「われ」が常に観察者であることが理解できる。リズムはごつごつしているが、素直な歌である。作者の歌集『下沼日誌』の出版記念会でもどなたかが言っていた「おもしろいのは作者の目」だと。「沼の辺の石の畳に靴脱いで何せんとすや行き復りして」も観察から生まれた一首だ。

●白ばらのアーチのトンネル歩むときエイトビートに弾んでしまふ

河村郁子

なんとといっても「エイトビート」が効いている。この表現で、作者の行動力、茶目っ気があらわれ、十首全体に楽しさが漂う。「アーチ」「トンネル」と片仮名が並ぶと、四句目からは無難にまとめたくなくなるころだが、そうはしない。型のなかで、ぎりぎり型破りをなしているところが魅力か。「海のぞむ山のなだりのバラ園に六月の陽のUV^{あまね}治く」もいい。

●打水す一白うさぎ良き兆し

岩田都女

平成二十三年は卯年であるからこの句を選んでみたが、タイトル「山滴る」が示すとおり夏の俳句の一連である。「口中に含む梅干大暑かな」「いかづちや仁王の足に力瘤」など、作者の句には身体感覚が表現されている。あるとき詩の一節のように五七五が浮かんできて、俳句のように仕立てた経験があるが、なかなかどうして、そう簡単なものではなかった。年季が入った十句と思った。

●竹の子汁一本ままを山の家

国井ふみ子

東北の根曲がり竹。食べたことのある人には、たまらない句だろう。なんとという贅沢。食べ物には句があり、季節と場所が一致しないと味わえないということを改めて思わせてくれた。「倒木の四方に芽吹きの色放つ」は美しいなかにも、人の輪廻転生を感じさせる一句。

60号作品短評〈新関〉

●「ある一日」

松井淑子

目覚めて夢をみていたことが、ありありと想起できる時と、火が消えるように忘れてしまふことがある。ただ、その夢の内容が事実無根で荒唐無稽であることはまずない。時間や空間、登場人物がばらばらで、パッチワークのような映像ではあるのだが、どこかは必ず事実に即している事柄がある。筆者の場合は仕事友達のM子さんであろうか。

それにしても昼寝をして同じ日に、二度夢をみたことが書かれており、何とやらやましい日であったことだろう。だが、疲れたかもしれない。私は最近昼寝で夢をみたことがない。

●「終わりは始まり」

岸 洋介

筆者は故安達裕之氏のこれまでの「展景」に載った詩や文章に対して「彼の詩や文章が如何にユーモアやアイロニーに溢れて、時に邪気をもつてしても、また時にどんなにアンモラルな素振りをして、その裏返しに、密やかに義理や人情を重んじ、倫理的であろうとする祈りが見て取れた」と的確な批評を述べている。まさに彼の心情をこれほどの確に述べている文はないと思っていた。彼は都会にいて、自由で孤独を愛してはいたものの、いつも故郷を思い、人好きで義理と人情に厚い男であったことは間違いない。その振幅の大きさをいつも抱えながら、酒を飲み、人を愛し、活字を愛した人間であった。そして、改めて思うに、筆者の述べるとおり、生き死にするあらゆる他者に支えられて、人は今を生きていると言っほかない。

〈展景第60号より〉

山形よ

安達裕之

朝はダス

スイガは尾花沢

そばは谷地

広野屋の焼そば

明石の中華

富山さんちのナス漬づげ

んだ

雲の峰いくつ崩れて月の山

東京歌会（第十八回）

平成二十二年十月二十一日（木）。会場は、文京シビックセンター三階和室。詠草は、各二首十二首。出席者は、ゲストを含む七名（大石久美、小野澤繁雄、河村郁子、林博子、丸山弘子、松井淑子、結城文）。

・東京ツ子は豆餅が好き夕暮の門前仲町に途中下車せり 大石久美

どんな豆餅？ 三角形をしていて、蜜豆の豆のようなのが入ってるやつ？ 伊勢屋のじゃない？ と東京育ち、近くに住んでいた者、と一頻りはなしが盛り上がった。この「東京ツ子」は作者のこと。夕暮れ、途中下車、も歌にメリハリをもたらす。何より「門前仲町」の響きがいい。好評。

・城あとの常盤木門に倚りをれば若きが道をゆづりてくるる 中川禮子

「常盤木門」は魅力的。城の名を出したほうがよいかもされない。こちらが「門に倚りをれば」若者が道をゆづってくれたという状況が今ひとつ判りにくい。

・大小の水槽おかれ一間の床の間は亀らの場所になりはつ 丸山弘子

「一間の床の間」の大きさに少し議論が集まった。水槽も大小あり、亀ら、と複数なので、いくらの経過のなかで増えてきたところか。床の間として使われていた頃も当然にあった。「なりはつ」には、そういうやや長い経過感も出ている。

・夜の葉むら打つ雨の音身めぐりに本放埒に積み重ね座す 結城 文

「夜の葉むら打つ雨の音」は、葉むら、雨の音の近さを感じさせる。そのことで偶々に反省的な意識が生じたことが「放埒に」に見える。「積み重ね」は、今現に行われた動作のようにはみえないか？ の声あり。

・この夏の暑さのゆえかスイレンの茎立つ葉にも多く先枯れ 小野澤繁雄

ことしに特徴的な夏の暑さ。「茎立つ葉」がよく観察されている、の声があり。結句が苦しい。「先枯れ多し」の案が出された。

・はじめての米子空港に降り立ちてまるやかに秋の風に包まる 河村郁子

空港に降り立って、そこで秋の風に包まれるように感じた、という。「まるやかに」はこの歌のポイントだが、不可欠かどうか。米子空港の地方性がこの歌にはそぐうようだ。

（小野澤）

〈特別企画〉

「展景」アーカイブ版刊行にあたり、「展景」を創刊した布宮みつこの当時の作品を掲載します。

布宮みつこ

屋根屋根の白雪積もりたるままの形を保つ未明の静寂^{しじま}

きさらぎの深空^{みそら}まぶしも昨夜^{よべ}降りし雪の真秀^{まほ}らに立ちて仰げば

東北もユキ東京もユキ朝のテレビに映る雪みな遠し

雪いろは凜冽なりき東京の雪踏みしめて偲ぶみちのく

彼方より歩み寄り来し白猫の向き変へるとき吾を視つむる

大けやき冬の木立となり果てて切絵のごとし群れ^{むら}ぬる鴨^{ひよ}も

安井先生 三首

かなめ垣つづく坂道上り来て安井鍼灸所の看板に出会ふ

わが脈を大名脈と診給ひし安井先生の愛語^{あたら}鮮し

行政に關はることば美^はしきやし「年をとつたら板橋区」とぞ

音のして雨の音して俄かにも四温のひびき部屋に充ちくる

〈展景第1号 一九九三年（平成五）三月〉

茂吉抄

布宮みつこ

サイドカーにて取材をしたるをとめわれ ”ミス頑固“ とふ渾名もらひて

茂吉翁納骨式を取材しき読売新聞山形支局のわが初仕事

昭和二十八年五月二十四日茂吉のみ骨納まりぬ蔵王金瓶宝泉寺

悪妻の名を吾は知らじ襟足の美しかりし輝子夫人よ

桜桃の花吹雪くころ金瓶に帰り来ましぬ壺の中の茂吉

正座せるわが師哀草果先生よ茂吉を語りて面滂沱たりけり

『茂吉秀歌・赤光百首』を校正せり没後四十年の花冷の季

同門にあらざる塚本邦雄氏の『茂吉秀歌』をつらぬく畏敬

息つめて『赤光百首』の稿閉ぢぬエディター冥利のひかりを享けて

来し方の迷路こそ愛しけれ茫茫として春がすみ曳く

〈展景第3号 一九九三年（平成五）七月〉

布宮みつこ（ぬのみや みつこ）

一九二八年五月、山形県西村山郡河北町谷地に生まれる。旧制谷地高女を経て、一九四八年宮城県女子専門学校国文科卒業。一九五二年結城哀草果氏に師事、「赤光」会員となる。一九五六年『布宮みつこ詩歌集 女の音』刊。翌一九五七年三月上京。一九八七年上田三四二氏に師事、「沙羅」会員となる。一九九三年三月季刊同人誌「展景」創刊。二〇〇二年『布宮みつこ歌集 紅』刊。二〇〇五年（平成六）七月死去。享年七十七。

対詠 ごきげんいかが？ PART37

○ 小野澤繁雄

N 布宮 慈子

○ マンホールのフタにつと手を触れつ人さけて林の道をこし少年は 9月30日

N 古い易き少年の夢叶ひたりノーベル化学賞のお二人 10月7日

○ 近づいてなお女男の別しれぬ声東中そのテニスコートに 10月10日

N 金木犀こぼるる道を走らせて透明になるわれと自転車 10月12日

○ 紅葉に後先ありて実をもてる木々より先にもみじし始む 10月14日

安達裕之、十月十五日逝去。享年四十七。

N 張り詰めてをれど弟失ひしやうに穴のみ黒々と見ゆ 10月24日

○ しりあうに遅き早きあり遅くしり早く死なれし君とおもうも 10月31日二首

靴を履かんとせしままにこときれしという君今不自由ないか

N 寺山の年まで生きて果てるとは競馬と芝居の人生みたいだ 10月31日二首

面白き男であつた「ンまい！」と鳥羽産の魚の天ぷら食みて

「清紫会」だより

◆第71回 平成二十二年五月二十日(木)、会場・文京シビックセンター三階和会議室
〈提出作品〉岩田トメ／戻ってきたパスモ 小野澤繁雄／近隣公園の人 河村郁子／フオゲツ
タブル 林博子／歯を抜く 結城文／グラウンドゼロの鉄骨

◆第72回 六月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階和会議室
「どうしても断られない講演を頼まれたので」ということで、今月は、外山滋比古先生はお休み。会員だけで、提出作品の合評会をすることにした。

〈提出作品〉池田桂一／これでいいのだ？ 小野澤繁雄／新しい歩き 河村郁子／ローズガール
デンゴ熱海 林博子／かわいい人 松井淑子／ある一日 結城文／ワルプルギスの夜――
リーパイア

◆第73回 七月十五日(木)、会場・文京シビックセンター三階和会議室
今月は、外山滋比古先生から最新刊のご著書『裏窓の風景』(エッセイ集)を頂戴した。先生のご著書を読むことはエッセイの勉強にもなるので、会員一同大喜びである。

〈提出作品〉池田桂一／うまそうな雪 岩田トメ／メロン 大石久美／嘘のように 小野澤繁
雄／五領沼まで 河村郁子／老化警報が出た 林博子／啄木鳥の穴 松井淑子／板橋宿の小鳥
屋 結城文／北のモロッコ

◆第74回 八月十九日(木)、会場・文京シビックセンター三階和会議室
〈提出作品〉池田桂一／先客 大石久美／東京スカイツリー 小野澤繁雄／夏の作業 河村郁
子／母の時計 林博子／お盆 丸山弘子／中近のメガネ 結城文／十字架の丘

◆外山滋比古先生からのアドバイス
文章を書くときは、どういう相手に読ませるのか、読ませる対象を意識して書く必要がある。
手紙などのように、よく知っている人あてに書く文章では、文中で取り上げる話題について共通認識のある場合が多いので、かなり省略して書いていても、意味が通じる。

しかし、まったく知らない不特定多数の人に読ませる場合はそうはいかない。エッセイを書くときは、不特定多数の人を読者にと心得、何事もいいねいに説明することがたいせつである。

(松井)

外山滋比古先生を囲むエッセイ教室「清紫会」の作品より

グラウンドゼロの鉄骨

結城 文

私の今住んでいる所は、自衛隊人間基地の脇になる。毎年十一月に行われる航空機ショーの前になると、練習のため隊列を組んだ飛行機が旋回してくるので、そのエンジン音はやかましいが、見上げるとピンク、ブルー、白などの煙を曳いていたりして、なかなか美しい。

先日、市内のある場所にいた時、キーンと耳をつんざくような爆音がした。なるほどそこは、滑走路から飛びたった飛行機の針路にあたっている。屋根の上でどうやら旋回をしたらしい轟音に、会話も途絶えた。

第二次大戦に敗れ、戦争を放棄した日本も、自衛のための軍隊をもつことが、賛否両論の激しかった時期もすぎて、当然のこととして受け入れられている。独立国家であれば、それは当然のこと——しかし、普天間問題が示すように、日本の防衛は、まだまだアメリカに依存しているのも事実である。

大戦後の世界でおこった戦争で、我々の意識にのぼりやすい戦争を考えると、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガン戦争、イラク戦争、東欧の民族自決にまつわる戦争、パレスチナ・イスラエル間の紛争、アフリカの部族間の戦争など枚挙に暇はないが、いずれも局地戦にとどまって、前世紀のように世界の国々を巻き込んだ大戦にはならなかった。

その最大の理由は、なんといっても核兵器の存在であつたろう。今世界の大国はいずれも核を保有しているから、いざ戦争になり、ある狂信的な指導者がそれを使用した場合、人類の、地球自身の破滅に繋がることが分かっているからである。いわゆる、核が戦争の抑止力として働いてきたのである。

そしてオバマらによる核廃絶の機運が、ようやく見え始めたところに、我々は現在いるのだと思う。

太平洋戦争末期、空襲で東京の横浜の五〇%以上が焼け、原爆がヒロシマ、ナガサキに投下され、一つの都市全体が一発の爆弾で一瞬のうちに消滅してしまう戦争を我々は体験している。

しかし、二十一世紀の戦争とはどんな様相を呈するのだろうか。大きく分けて二つの様相が考えられる。一つは、今頻発しているテロに対する戦いであり、もう一つは核弾頭を搭載したミサイルによる国家間の戦争である。

そのどちらの場合にしても、いつどこで、なにがおこるか分からない恐怖に、我々は絶えず曝されているといっても過言ではない。

いつ遭遇するかもしれないテロ、ある日突然海の向こうのどこかから核ミサイルが発射

されてくるような、敵の姿さえみえない戦争になるのではないだろうか？ そうした不気味さを、我々は笑い飛ばすことができようか？

核廃絶がようやくいわれたことは、一抹の曙光である。核というものを作り出した人間の知能なら——核というものをコントロールする人間の叡智に、祈るように期待するより外はないと思われる。

不透明な漠然とした不安——それは二十一世紀を生きる我々の宿命なのであるか。

この五月に訪れたニューヨークのグランドゼロの工事現場近くには、十字架の形に残ったM・H・C（世界貿易センター・ビル）の鉄骨が、やがて完成後の跡地に移される予定だという表示とともに、赤錆びたまま立っていた。

（二〇一〇年五月二十日）

うまそうな雪

池田桂一

今年の気候は、例年になく異常としか思えない。四月半ば近く、桜が満開なのに雪が降った。

糖尿病の検査入院で病室で過ごしていた。二週間の予定である。三日目だったが、食事制限は、一日で一六〇〇キロカロリー。

味はうれしいし、量は少ないので、これではストレスがたまったらどうなるのだろう、と心配になった。

朝・昼・晩と、夜間十時には血糖値の測定がある。とにかく、お腹いっぱい食べていた身体には、空き腹で動く気にもなれない。本を読んでも集中できずに、何となくベッドでゴロゴロ過ごしていた。

四日目の朝である。目覚めの時間が少しずつ早くなり、その日はまだ誰も起きていなかった。だが、いやに静かであり、少し肌寒い気がしたが、何となくいつもとは違う雰囲気である。

ベッドは窓際だったので、カーテンを開けてみると、一面の雪景色である。窓から見える一〇〇メートル先の4号国道を行き交う自動車の音が、積雪で吸収されていて、響いてこないのである。

四月に入ってから積雪は二十六年振りだというテレビのニュースだったが、記憶には残っていない。ちょうど、最後の会社内で、停年が早くなるかもしれない、という話が出ていた頃である。

幼い頃の冬の積雪は、毎年三、四〇センチ位で、三月頃には根雪がなくなり、遅雪でも三月二十一日の地藏尊の祭りの日が終わりのようだった。そして、その日には必ずといっていいほど天気が悪くなり、雨やみぞれ、小雪などに変わるのだった。

地藏尊の祭りは、この地方の、その年の最初の祭り、近郷近在からの老若男女の参詣者で賑わった。その頃は、着物姿などでの参拝者が多く、裾がめくれるほどの突風が吹くことから、不名誉な「助平地蔵」などという言葉が交わされていたのを覚えている。

病室は四人部屋で、朝食の七時半が近づくと、ベッドを取り巻くカーテンを引き、挨拶を交わして食膳の用意をする。テレビがあっても、音声を出して観るのは遠慮して、ニュース以外はつけることはない。

窓から眺める積雪は、三センチ位だったろうか。まだ散り始めない桜に積もっていた雪は、時間が経つにつれてみぞれ状に融けてきて、ピンクの色の雪に見えた。

食べたら、おいしいだろうなあ、と空腹に悩まされている現状には、のどから手が出そうになるほどうらめしかった。

(二〇一〇年七月十五日)

戻ってきたパスモ

岩田トメ

地下鉄後楽園駅の改札を出る時であった。

何時ものように改札機に、パスモとシルバーパスを収納してある定期入れをタッチして、改札を出ようとしたら、機械が通せん坊をする。どうして。定期入れを見ればパスモがない。シルバーパスもない。中目黒駅では改札を通過したのだから、中目黒の改札機を出た以後に落としたらしい。定期の口の部分の皮が緩んできたからすべり落ちたのだろうか。

後楽園駅員に申告した。「パスモを落としたらしい。どうしたらよいでしょう」

「乗車駅は」「中目黒駅」「パスモに氏名の記名は」「書いたかしら、覚えていません」

そうだ思い出した。シルバーパスの昨年度分購入の時、事務員が「氏名を書いた方がよいですよ、落とした時に届け出があります。間違いなく手元に戻ってきます」。自信たっぷりに記名を薦めた。「名前があると戻ってきます」。このような助言は私には初めてだ。かつてはなかったような気がする。今のご時世に届けてくれる奇特な人がいるのですね。半信半疑であった。さてどうしたものかと考えた末に。

〈情報公開を嫌う世の中に逆行する〉のではと思いつつ、シルバーパスに名前を書いた。

その後、パスモを再購入した時に、機械に名前を記入するボタンがあったので、無意識に名前を入れた。そんなことを思い出し、駅員に氏名と電話番号を告げ帰宅し、さて驚いた。すでに、後楽園駅から留守電が入っている。

「中目黒駅にありました。明朝、印鑑を持参し後楽園駅の駅務室に取りに来てください」
今までの私の考えだとシルバーパスは若い人には使用できないが、パスモ（スイカ）は誰にでも使えるから、良い拾い物をしたとし、届け出る人などいるわけではないと信じていた。私は拗ね者か。いや社会情勢に疎いのか。

地下鉄の改札付近のような、時間を惜しみ、人がわざわざしている場所でも、煩わしさを厭わず届け出る人がいるとは。清廉な人々が多い平和な日本がうれしい。そして、自分が恥ずかしい。届け出てくださいった方の氏名住所を聞きそびれ、お礼状が出せないのだ。

(二〇一〇年五月二十日)

板橋宿の小鳥屋

松井淑子

友だちと板橋宿を歩きにいったときのことである。

宿場のはずれ近くに小鳥屋を見つけ、鳥好きの友だちがいち早く駆けよった。軒の低い小さな店で、店先に十個ほどの鳥籠が積み上げてある。

「インコ、カナリヤ、十姉妹、白文鳥」

二人して小学生のように声をそろえて、知っている小鳥の名前を並べ立てているうちに、ある籠の前で、

「あつ、この赤っぽい小さな鳥は何？」

と友だちが声を張り上げた。

籠の中には、くちばしが真っ赤で、全身ほぼ赤褐色に白点が散った、体長十センチにも満たないごく小さな小鳥が十二、三羽、止まり木で押し合いへし合いしている。

「紅雀だよ」

奥から声がして、小柄、小太り、丸顔の、還暦間近と思われる男の人が出てきた。この店の主人のようである。

主人は私たちをじろじろ眺めながら訊いてきた。

「あなたたち、どこからきたの？」

「渋谷方面から。この町を歩きに来たの。ご免なさい、お客じゃなくて。小鳥が好きだもんだから、つい見に寄ってしまった」

「いいんだよ、気にしなくても。このごろは買ってくれるどころか、寄ってくれる人もいないんだから」

誰も寄ってくれないんじゃないじゃあ、やる気がなくなる。犬屋は繁盛しているらしいけど、今は小鳥はまったくダメだ。その証拠にデパートの小鳥売場はほとんど閉鎖したし、町の小鳥屋もほとんど潰れている。うちも廃業しようかどうか迷っているところだ、とひどく投げやりな調子で言う。

通りすがりの私たちを相手にこんな愚痴をこぼすところを見ると、ほんとうに暇なのだろう。

そのうち、小鳥を飼ったことがあるか、と尋ねるので、文鳥を四羽、順繰りに手乗りにならせたことと、そのうちの一片が雄で、雛のうちから、いろいろな野鳥の声を吹きこんだレコードを聞かせてやったら、そのせいかすごくよい声でながながと囀るようになったことを話したら、主人は、さっきまでの投げやりな態度はどこへやら、急に目を光らせ、真剣な顔をしたので驚いた。

ひよっとしたら主人は、廃業の話は棚上げにして、囃りのうまい文鳥を育て、商売になげてみようと思っただのではないか。そう想像したら、ちよっといい気分になった。

(二〇一〇年七月十五日)

無二の会短信

◆「徹子の部屋」を視ていて、ゲストが笑わせると、黒柳の声が布宮みつこさんの声に、よく似ているのにびっくりした。今年は七回忌を迎える。」ところで、私の四篇の小説の製本は、どうなっているの！」と、厳しい声が受話器から聞こえてきそうである。

池田桂一

◆目黒郷土研究会の依頼で佐藤佐太郎氏の事を「郷土研」へ載せることになり、佐太郎さんの周辺を調べた。佐太郎さんは昭和四十六年から蛇崩川近辺に住み、晩年十年ここを散歩し、同じ対象をたゆみなく読み続け、蛇崩の地にちなんだ囑目詠を残し、蛇崩の地名を全国的に定着され、脳血栓の病に苦しみつつ、写生歌人としての矜持と信念を貫かれた生き方に励まされる。

岩田トメ

◆「お会いしたいですね」。毎年のことながら、十二月に入ると、まずクリスマスカードを書き始める。挨拶文程度から、一年間の近況を伝え合う友もいる。すかさず年賀状である。年一回の交流ともなれば、一通ごとに感情移入して、交誼の重さを実感。

河村郁子

◆展景の立て役者、安達裕之氏がひとりで行ってしまった。親しい従兄弟の突然の死である。時折、彼の人生を思い出しては、言葉にできぬ寂寥感におそわれる。あの世から幼少期にみせた屈託のない笑顔で「しんちゃん、呑むべ」と呼んでいるような気がする。合掌

新関伸也

◆丈夫なたちで病気で寝こむことがあまりない。それが珍しく熱を出した。咳もどの痛みもないのでなんだろうと思っていたら、顔面の骨が痛みだした。病院に行ったら急性副鼻腔炎とのこと。病名は知っていたが、自分がかかるとは思わなかったのでびっくり。

松井淑子

◆朝、温めた牛乳をとり出そうとしたら、電子レンジの扉が開かない。押しても叩いてもビクともしない。危険だが、刃物を使った。開いた。しかし、次の時に開く保証はない。覚悟をきめなければと思いつつ、扉の廻りを丁寧に拭いたら元通りになった。お粗末でした。

丸山弘子

◆安達裕之さんが亡くなった。その二カ月後に自分の本が出版された。秋から冬にかけて、悲しみと喜びが錯綜した。禍福はあざなえる縄のごとし、というけれど、そんなことわざすら憎々しくなるような日々だった。

山内ゆう子

◆白に、中心部と縁が赤紫のシクラメンが、今を盛りと咲いている。花を数えてみたら十あった。スワンの首のような蕾も、日ごと丈が高くなっている。このシクラメン、私のチャランポランな管理にもかかわらず、もう同じ鉢で十数年生きているすぐれものなのである。

結城 文

編集後記

◆紙からオンライン版へ。パソコンは使えないからと言った人もいたが、多くの方は新しい挑戦に拍手を送り、協力してくれている。原稿の半分くらいはデータでもらっているの
で、一人ひとりが自分の原稿に責任をもつということかもしれない。オンライン版第一号
は予定よりも遅れたが、今後はより新鮮な作品を読んでもいただけるのではないかと思っ
ている。

◆「展景」の編集人をつとめていた安達裕之が亡くなった。長く糖尿病と付き合いきた
わけだが、まわりに病気ということを感じさせなかった。自分のことはさておき、他人の
ことを心配する人だった。四十七歳の若さであった。一緒に同人誌をつくってきたもの
にとって寂しいのは、かれの批評が聞けなくなったことである。短歌や俳句、エッセイ、ど
れをとつても独特の咀嚼のしかたで意見を言ってくれた。みんな、かれのひと言ひと言に
内心恐れながらも耳を傾けたものだ。冊子の「展景」が終わるのに合わせたように行っ
てしまった安達裕之さん。どこかでちゃんと見守っていてください、お願いします。

(布宮慈子)

二〇一一年三月一日 発行

編集・発行人 布宮慈子

オンライン版制作 堀 哲郎

無二の会・展景発行所
東京都武蔵野市

muninokai.com